

はじめに

インド経済は1991年から経済改革を実施し、それまでとってきた輸入代替工業化戦略からの転換を図った。1994/95年度からは3年連続で実質GDP成長率が7%を超えたため、中国に続く市場として注目を集めるようになった。その後投資ブームが終わり、製造業の成長率が伸び悩んだが、依然として実質GDP成長率は4%から8%の間で安定して推移している。1991/92年度から2003/04年度までの平均GDP成長率は5.9%となっている。このような状況を反映して、現在再びインド経済が脚光を浴びるようになった。インド経済の入門書として1995年に伊藤正二・絵所秀紀著『立ち上がるインド経済——新たな経済パワーの台頭』（日本経済新聞社）が出版された。しかし、出版から10年が経過しており、当時著者が呈示した展望を見直す必要がある。本書は入門書として、インドの社会経済的構造を明らかにした上で、経済改革の影響を分析しようと試みた。

第1部では農業、労働市場、貧困削減について取り上げる。第1章はインド経済を概観する。GDPの構成は第1次産業から第2次・3次産業へと変化しているにもかかわらず、労働力人口の構成は現在でも60%が第1次産業である。これは農村が過剰人口を抱えていることを反映している。第2章は食糧問題をとりあげる。インドでは独立後、年率2%前後で人口が増大してきた。その中で食糧輸入国から輸出国へと転換することができた。しかし、穀物生産は需要と供給両面において問題がある。第3章は貧困層に対して低価格で穀物を供給する公的分配システムを取り上げる。早魃の際に飢饉を回避することを考えたことを考えると、公的分配システムの果たしてきた機能は一定の評価ができる。しかし、政府の介入システムが需給状況の変化に対応できるか、WTOの交渉によっては国内政策の変更が求められる、低所得層でも家計支出に占める穀物消費の比率が下がってきており、公的分配システムの意義が低下している、という問題がある。第4章は労働市場を分析している。インドの労働法制によって最低限の労働条件が保障されている組織部門（従業員が25人以上）で就労している労働者はごく一部に過ぎず、多くの労働者は労働条件を保障されていない。経済改革後にストライキ数が減少した。各企業は合理化を進め、余剰

人員を削減する一方で、人的資源管理を通して労働生産性を向上させようとしている。第5章は1980年代以降の農村部と都市部の貧困削減プログラムの流れを概観する。貧困削減プログラムでは公的雇用が重視されてきた。生活インフラ整備、教育や保健の社会サービスでは、民間部門の台頭という共通性が見られるが、低所得層への公的サービスの提供という政府に残された課題も大きい。

第2部では経済改革が各産業に与えた影響を分析している。第6章は鉄鋼業を取り上げる。鉄鋼業は経済改革まで民間の参入が認められていなかった。経済改革後に小規模な電炉メーカーが参入したが、生産・消費において連関が存在せず、二重構造となっている。鉄鋼業は民間部門の参入を検証する上で重要である。第7章は製薬業を取り上げる。インドは先進国のオリジナル医薬品を模倣したジェネリック医薬品の輸出を増大させてきた。しかし、WTOの規定により特許法の改正を迫られ、医薬品の模倣がむずかしくなった。制度の変更が輸出に与える影響を検証する上で、重要な産業である。第8章は経済改革以降、順調に発展を遂げてきた自動車産業をとりあげる。既存企業の生産拡大と新規参入により、2輪・4輪の生産台数および部品生産額は急増する一方で、競争が激しくなっている。第9章は小規模工業を取り上げる。インドの経済計画において小規模工業振興は雇用の創出、公正な所得分配と経済力集中の排除、地域格差の是正の観点から重要視されてきた。また、特定の分野について中・大企業の参入を禁止し、小規模企業が排他的に生産を行えるようにする留保政策が採られてきた。しかし、そのために採用されてきた政策が時を経るにつれて保護主義的なものと化し、経済自由化下においても、ダイナミズムが欠如している状態である。第10章はIT産業の急成長を分析している。インドはオフショア開発モデルを駆使しながら成長を遂げてきたが、エンジニアの賃金上昇と離職率の上昇、その他の発展途上国との競争、アメリカおよびイギリス市場への過度の依存、ローエンド・ソフトウェアの輸出への特化といった問題を抱えている。

本書は2005年3月までのデータに基づいて執筆した。出版・編集でご尽力頂いた(株)風行社の犬塚満氏と伊勢戸まゆみ氏に感謝の意を表明したい。本書がインド経済の理解に少しでも役にたてば、编者としては幸甚の至りである。

内川 秀二

目 次

はじめに [iii]

訳語対照表 [x]

第 I 部 インド経済の構造的特徴

第 1 章 総論——経済改革後のインド経済 内川秀二 [2]

はじめに 2

第 1 節 経済改革後の投資ブーム 3

第 2 節 農業生産と貧困削減 9

第 3 節 州間格差の拡大と州・連邦政府の財政配分 15

第 4 節 IT産業の発展と国際収支 20

第 5 節 日印経済関係の現状 22

第 6 節 インド経済の課題と展望 27

第 2 章 食料需給の構造と課題 須田敏彦 [31]

はじめに 31

第 1 節 インド農業の概略 32

第 2 節 将来の穀物需要の検討 37

第 3 節 穀物増産の可能性 47

第 4 節 農業後進地域における穀物増産の可能性と課題 54

おわりに 67

第 3 章 公的分配システムをめぐる穀物市場の課題 首藤久人 [77]

はじめに 77

第 1 節 穀物市場の概要 78

第 2 節 政府穀物流通が抱える問題 86

第 3 節 公的分配システム PDS とそのターゲット化 97

おわりに 117

第 4 章 インドの労働経済と労働改革のダイナミズム 太田仁志 [126]

はじめに	126
第1節 労働市場の概観	127
第2節 マクロ・レベルの労働改革を巡る近年の動向	140
第3節 ミクロ・レベルの労働改革	152
むすび	162

第5章 貧困削減プログラムの現状と課題…………… 辻田祐子 [168]

はじめに	168
第1節 貧困指標の推移——1990年代の特徴	170
第2節 貧困削減プログラムの推移	176
第3節 社会政策と留保政策	185
おわりに	201

第II部 経済自由化後における産業の変容

第6章 経済自由化以降のインド鉄鋼業の変容…………… 佐藤創 [218]

はじめに	218
第1節 インド鉄鋼業の歴史	220
第2節 政策の変化	221
第3節 技術の変化	222
第4節 産業構造の変容	230
第5節 需要構造と輸出入の動向	234
結び	238

第7章 特許制度改革下におけるインド製薬産業の動向
…………… 久保研介 [242]

はじめに	242
第1節 医薬品産業の政策と発展	243
第2節 1990年以降の医薬品企業パフォーマンス	250
第3節 企業データからみたR&D動向	256
むすび	264

第8章 地場企業の基盤が注目されるインド自動車産業の発展
…………… 島根良枝 [268]

はじめに	268
第1節 政策の変遷	269

第2節	産業発展の過程	272
第3節	産業発展の特質	278
第4節	今後の展望	286
	おわりに	288

第9章 市場開放後の小規模工業——社会経済開発の行方 二階堂有子 [294]

	はじめに	294
第1節	小規模工業の位置づけ	295
第2節	小規模工業を優遇する理由	298
第3節	経済自由化の影響——第3回全インド小規模工業センサスから	303
	結びにかえて	313

第10章 インドの情報技術産業——現状と今後の課題 B・ムニラトナム（内川秀二訳） [318]

	はじめに	318
第1節	インドにとって高まるIT産業の重要性	320
第2節	IT産業の構成要素と構造	323
第3節	インドの競争優位性	328
第4節	将来の課題	339
第5節	IT分野における日印協力	344
	結論	347

索引 [352]

執筆者一覧 [357]

インド概略地図

